

おいしいすいかのたべかた

作・絵 やまぎもともこ

①

あんちゃんねずみ 「やあ、ことしもあるぞ。まんまるくて

ふとつて ピッカピカだ!!」

あんちゃんねずみは、下の部屋をのぞいてさげびました。

その声をききつけたのは、ことしうまれたちびねずみ

ちびねずみ 「あんちゃん、なに? なにがあるの?」

あんちゃんねずみ 「とびつきりおいしいばあちゃんの

すいかだ。」

ちびねずみ 「えっ? すいか? すいかってなに?」

あんちゃんねずみ 「おしえてあげよう。ついておいで。」

2 ひきは、そおっと下の部屋へおりていきました。

②

下の部屋は、うすぐらくてお線香のにおいがします。

あんちゃんねずみから離れないよう、いっしょうけんめい走っていたちびねずみは、部屋のまん中までくると、ピタッと足が止まりました。

ちびねずみ「あんちゃん こわいよう!!」

ガタガタ ふるえるちびねずみをみて

あんちゃんねずみは じまんげに言いました。

あんちゃんねずみ「だいじょうぶ、だいじょうぶ、

これがすいかだ。」

あんちゃんねずみ 「ばあちゃんのすいかは、とびきり

うまいんだ。たべたいだろ？」

するとちびねずみは、首を横にふって

ちびねずみ 「そんなのいらない。すいかなんて

たべないもくん。はやくおうちへかえろうよう。」

あんちゃんねずみ 「そうか。そりゃあ ざんねん。

すいかは おいしいだけじゃない。

とつても たのしいんだぞ。」

あんちゃんねずみは、やさしく声をかけました。

あんちゃんねずみ 「その1。^{いち} すいかは、スベリ台だ。

ほら、よく見て「らんよ。」

あんちゃんねずみは、すいかをガシガシのぼり、
てっぺんからつるつとすべりました。

あんちゃんねずみ 「やつほ〜。」

ところがいきおいあまって、どっし〜ん。

ちびねずみ 「あんちゃん だいじょうぶ?。」

あんちゃんねずみ 「だいじょうぶ、へっちやらだ。

その2。^に すいかはサーカス玉のりだ。

「うやつのって、へっへっ ひえ〜。」

あんちゃんねずみははりきりすぎて、すいかもくるくる

まわり、目がまわってヨタヨタヨタ。

ちびねずみ 「あんちゃん！ おかしいよ。アツハツハツハ。」

あんちゃんねずみ 「おもしろいか。その3。^{さん} すいかわり〜。」

ちびねずみ 「え? すいかってわれるの? やりたい。」

ちびねずみは棒をもって、かまえました。

ちびねずみ 「えい!! やあ!! こんにちは!! われる!!」

ちびねずみは、力いっぱいすいかをたたきました。

あっちからこっちから、いくどもたたきました。

でも、いくらたたいてもわれません。

ちびねずみ 「あんちゃん。すいかわれないよう。」

あんちゃんねずみ 「おとすとわれるから気をつけてって

ばあちゃんが言っていたぞ。」

ちびねずみ 「なんだ。おとせばいいんじゃない。」

2ひきのねずみは、大きなすいかをころがして

玄関のふちまで運びました。

⑥

あんちゃんねずみ「いいか、おとすぞ!!」

2ひきは、大きなすいかを力いっぱい押し出しました。

2ひきのねずみ「えい!!」

すいかは宙ちゆうをとび、土間どまにおっこちて

（ぬきながら）

みごとにわれました。

こまかくわれたすいかは、土間中どまじゆうにちらばって
キラキラかがやいてみえました。

ちびねずみ 「わあ。すいかって あかいんだねえ。

花火みたいできれい。」

ちびねずみの目も、キラキラかがやいていました。

あんちゃんねずみ 「なるほど、あかい花火か。」

あんちゃんねずみは、しばらくながめてから

はなしはじめました。

あんちゃんねずみ 「いいことを おしえてあげよう。」

あんちゃんねずみ

「このうちのばあちゃんはな。すいかと

はなしができるんだぞ。毎日かかさず

畑に行つては『おなかすいていないか？

のどがかわいていないか』つてはなしかけ

ていた。すると、すいかはどんどん大きくな

り、やがて畑いっぱいに葉をしげらせた。

こんどは、『風強くないか？カラスに

つつかれるんじゃないぞ』つて、わらをか

けたり糸をはったりした。大事に大事に

育ててきたんだ。」

ちびねずみ

「へえ。ばあちゃんて、すいかのお母さん

なんだね。」

あんちゃんねずみ「まあ、そんなもんだ。」

―ぬく―

あんちゃんねずみは、はなしをつづけました。

あんちゃんねずみ 「それからすいかは、花を咲かせて実をつけ
た。そうだ。すいかはたねをまいてから、た
べれるようになるまで、何日かかると思う？」

ちびねずみ 「わかんないよ。」

あんちゃんねずみ 「80日。もっとおいしいすいかになるには、
毎日、お日さまの光がたいせつなんだ。」

ちびねずみ 「お日さま。80日必要なんだね。ひやく。まぶしく
て目がつぶれるよ。」

あんちゃんねずみ 「おいしいすいかをつくるには、ばあちゃんの
愛と自然の力の2つともたいせつなんだぞ。」

ちびねずみ 「すいかをつくるって 大変なんだね。」

あんちゃんねずみ 「ああ、だから大事にたべないとな。

それじゃあ さっそくたべよう。その前に
みんなを呼んでこよう。」

あんちゃんねずみが合図をすると、仲間のねずみたちが集
まりました。 — 線までぬく —

あんちゃんねずみ 「おいしいすいかのたべかたは、両手で

しっかりとって、右から左へ ザクザク

ムシヤムシヤ、うゝ うまい!!」

仲間のみんなもまねをして、かぶりつきます。

間のねずみたち 「ザクザクムシヤムシヤ うゝ うまい!!」

ー のりをすべてぬく ー

あんちゃんねずみ 「こんどは左から右へ ザクザクムシヤ

ムシヤ、あゝうまい!!」

仲間のねずみたち 「ザクザクムシヤムシヤ あゝうまい!!」

あんちゃんねずみ 「なあ、口の中のたねはどうする?」

ちびねずみ 「たべちゃうんだよね。」

あんちゃんねずみ 「いいや。おもいつきり外へとばすんだ。」

あんちゃんねずみは、いきおいよくたねをとばしました。

ぷぷぷ。ぷぷぷ。ぷぷぷ。ぷぷぷ。ぷぷぷ。

ー ぬく ー

たねは 土間どまいっぱいに、とびちりました。

あんちゃんねずみ 「おいしいすいかほど、たねは遠くまでとぶ。」

ちびねずみ 「すごい！ あんちゃん。カッコイイ!!」

ちびねずみは、いつのまにか夢中になってすいかにかぶりつき、たねをとばしていました。

赤いすいかがすっかり緑になると、仲間のねずみたちはいなくなり、土間にはあんちゃんたちちびねずみが 2 ひきだけ。すいかのようにまんまるになったおなかをさすりながら、

ちびねずみ 「あんちゃん。すいかおいしかったねえ。すぐくおいしかった。また、たべれるかなあ。」

あんちゃんねずみ 「ばあちゃんがいつていた。

おいしってたべてくれると、またつくりたくなるんだってさ。」

ちびねずみは、大きく「うん!!」と、うなづきました。